

教科書における歴史の視覚的演出

—— 近代戦争の挿画を中心に ——

韓 炫 精

教育は子どもにイメージを与える行為である。イメージの辞典的意味は‘存在しない事物の顕現’であり、次のような両義性を持っている。つまり、何かに形態を与え、何かを本質に到達させ、何かに備わる不思議な力を完全に展開させるものを強調する一方、原像を模造、描写、記号化するものを意味するのである¹⁾。本稿で注目するイメージとは、歴史知を絵画で描いて伝えようとした教科書の具体的な挿画群を指している。

歴史学は資料を方法的に統制された形で集積し、保存し、習得するための技術という意味における記憶科学である²⁾。そこで得られた知見を、教育の場で伝達する際に問題が生じる。表象における科学と教育の差について今井（2008）は次のように言った。科学的な説明はフーコの古典主義的エピステーメにおいては、乱雑に見える現実を秩序だった記号の世界に表象することである。（Foucault 1996：79 f.＝1974：90f.）記号は恣意であり、取り決めにすぎないと割り切ることによって現実の世界とのつながりをつけることが出来る。しかし、こうした記号による、とりわけ科学的記号体系による表象によって意識は間隔や感性的直観という直接的基体からますますはなれてゆく。しかし、教育における表象はほとんど逆の構図を持っている。たとえば、コメニウスの『世界図解』は言葉と図像と数字からなる記号の世界ではあるが、しかし意識を「間隔や感性的直観」から遠ざけるのではなく、むしろ近づけようとする試みである。図像の利用はこの意図に従っている。図像は子どもにとって縁遠い現実を、感覚可能・直観可能にするはずであった。こうした「直観」の原理は近代教授学にとって不可欠なものである。教育における表象の装置は、「超えて示す」を実現するために、現実の一端を子どもの理解可能性の領域へと、いわば投錨（anchor）するのである³⁾。

本稿では歴史を児童に伝える際に、直線的文字メッセージだけではなく、イメージを用いて伝達し

ようと試みた時期に着目する。そのことによって、近代歴史教科書視覚的演出法の変化を考察した。近代教科書が刊行された明治期を視野に入れながら、本稿では国定化以降の教科書の挿画に焦点をあてる。一章では国定歴史教科書の編纂趣意書を中心に挿画関連項目を分析して「見せて教育する」思想の意味変化を探る。

歴史教科書の挿画の先行研究⁴⁾には、人物表象研究がある。これらは教科書の英雄像（神武天皇）、明治天皇の肖像、二宮尊徳、植民地人物像など、各々代表的な素材を持って丹念に史料を追跡し、現在まで引き継がれている人物表象が近代初期の国家イデオロギーによって創出され、定着されたという歴史性を明らかにした。これらは特定人物の選択と表現をめぐる意図とその変容の内容および絵画的表現法に焦点を合わせたところでは共通の基盤上にある。しかし、歴史知になぜ人物が動員されたか、また活字だけではいけないイメージ使用の必然性に関しては応えてくれない。

図像は辞典と同様にそれを描いた人の特殊な観点をドキュメントしているが、しかし同時代人に理解されるように、現実の社会的構成の歴史的にそのつど妥当している規則を考慮しながら形式化する。もしそうだとすれば、いかなる規則に従って教育現実が社会的に構成されていたかを、人は図像から解明することができる。このことによって解釈者には、単なる内容のみならず、特に形式的構造に注意をむけることが要求される。というのも、ほかにも増してこの形式的構造のなかに、「ハビトゥス」—社会的現実構成の規則を表わす表現—は開示されるのだから。モレンハウアーは、絵の資料を教育理論的に解釈する作業に対して教育学が言語的資料のみを主に検討することで、教育世界が象徴的で感覚的次元から構成される世界である事実が隠蔽されると指摘した⁵⁾。

歴史教科書の挿画への影響に関する先行研究とし

て1930年代の記念絵画館の歴史画運動がある。歴史を視覚化しようとした試みの過程を明らかにした美術史研究である⁶⁾。この時期に建立された記念絵画館の絵画が学校の歴史教科書に広く引用されたが、教科書刊行における印刷術の発達とともに、歴史絵画が歴史教科書に登場する出来事の背景に、当時の視覚文化の様子を見ることが出来る。アイヴィンスは近代国民国家形成に視覚的書物が大きく貢献したと指摘している⁷⁾。これに基づいて本稿の二章では歴史教科書の挿画の中で国民意識を強く醸成するテーマである「戦争」の内容と形式の変化を見る。対外戦争は殆どの社会構成員が経験したことがないものであるために、その伝達において受け手の視覚的欲求が送り手の技術的発達を促進し、戦争の視覚的な表象のあり方が急激に変わるようになった⁸⁾。歴史の視覚的演出を中心におくことでイメージの近代的使用法を浮き彫りにしようとした。

1. 歴史教科書編纂趣意書にみる挿画の位置

1903年の国定教科書制度が始まった時期に、教科書の制作は証史学的内容を重視したといわれるが⁹⁾、そのことは挿画の扱いに端的に表れている。

「児童ニ確實ナル觀念ヲ与エテソノ印象ヲ深くカラシメンガ為ニママ挿画ヲ挿入セリ。其の挿画は成るべく正シキ根拠アルモノ、想像ヲ以テ作為スルコトヲサケタリ。第一冊ニオケル仁徳天皇炊煙ヲ望ミタマフ図ノ外ハ総テニテ作為スルコトヲ避ケタリ。」『小学日本歴史編纂趣意書』(1903)

ここでは図像によって深く印象づけることが挿画掲載の目的であると述べている。その印象はあくまでも根拠に基づく歴史知であった。しかし、1909年の教科書においてはイメージに関する認識が変わるのである。

「旧教科書ニハ転居アルモノヲ扱ビテ是ヲ挿入シタリ。其ノ図様ニハ静止的モノ多く、且ツソノ数モ少ナカリシガ、教科書ニアリテハ児童ヲシテ本文ニ叙述セル事歴当時ノ状況ヲ想像シ易カシテ教科書ニ親シマシメンコトヲ目的トシタルガ故ニ、挿画ノ数ヲ多クシ、活動的ナルモノヲ扱ビタリ。其ノ中ニハ全く想像ニ出デタル画モ亦少シトセズ。」『尋常小学

日本歴史編纂趣意書』(1909)

「児童用教師用ニ分ケル。カクシテ文章ハ平易ヲ主トシテ説明的ノ筆法ヲ用イ、児童ヲシテ読易ク解シ易カラシメ更ニ成ルべく興味ヲ以テ教科書ヲ通習セシメンコトヲ期セリ。」『尋常小学日本歴史編纂趣意書』(1911)

1909年の教科書には、児童の興味を引き感銘を与える教材を加える。従来の図像が根拠を重視するために静止的なものを選んだことに対して、この時期の挿画の選択基準は活動的なもの、興味を持たせるものへ変わった。当時国定教科書編纂に従事した喜田貞吉(1871-1939)は、教科書におけるイメージの変化について次のように述べた。

「修正教科書に於いては、画の性格と云ふよりも、どちらかと言へば、面白いという方を主として選びました。随って其の挿画は出所あるもののみならず、殆んど何等の拠り所もなく、全く画家の想像から出来た画が非常に多い。随って此各個の画を一一学問的に研究したならば、或は果しては一つ一つ理屈に合っているかどうか保障できないけれども、小学校に於いては、さういふ細かい所まで研究して授ける必要がない積りであります。」…「最初の国定教科書が出所の明確なことではなければ出さなくて、重要な教材に挿画がなく、活動的ことが少なかったが、改訂によって挿画が意味する歴史解釈を学ぶようになった。」¹⁰⁾

この流れは1920年代の挿画にも続いて、児童の興味を引きやすい、活動的な挿画の数が増えている。

「旧教科書ヨリモ更ニ多クノ活動的挿画ヲ選ビ、児童ヲシテ事歴ヲ想像シ易カラシメ、且之ガ理解ヲ助ケテ学習ニ興味ヲ添エシメタリ。」『尋常小学国史上編纂趣意書』(1920)

この時期の挿画は多様な効果を企図して、様々なタイプの挿画を用いていたため、挿画に関する解説書¹¹⁾が登場した。知の伝達において挿画が持つ役割が大きくなったことを示している。一方、挿画が増えることによって、挿画を使用し歴史的状況を髣髴とさせる巧みな講術を駆使した教師の教授行為が制約された。教師の任務は本文の叙述に即したものや

挿画の意味のみを児童に知らせるように規定された。

「教科書ニアリテハ、直接本文易関係ナキモ享受者ノ敷衍講術ニ俟チテ当時ノ状況ヲ髣髴セシメントシタル挿画アリキ。サレド本書ニ於イテハ、本文ノ叙述ニ因メルモノトシ、直チニ児童ヲシテ挿画ニ現レタル意味ヲ知ルヲ得トシメントセリ。」『尋常小学国史上編纂趣意書』(1920)

また1920年代の挿画には既成図画や写真などを潤色したものが登場している。歴史の視覚的演出に様々なメディアが試みられる時期であるといえる。しかし、所在や様式は多様であるが、これらが共通に志向するものは写真的写実性であった。

「カカル動的ノ図ハ二十七図ニシテ静的ノモノハ五図ノミ。動的挿画ハ多ク想像画ナレド尚、…既制図画ニ潤色ヲ試ミシモノアリ。…写真ニ拠リシモノアリ。…写真ニ拠リテ飛行機ヲ配シモノアリ。其ノ他ノ十四図ハ全ク当時ノ事歴ヲ想像シテ描カシメシモノニ係ル。」『尋常小学国史下編纂趣意書』(1921)

1934年の『尋常小学歴史』の挿画については、藤岡継平の『挿画を中心とする国史教育—尋常小学国史挿画の解説と其の精神』(1938)に詳しい。文部省編集課長・図書監修官であった藤岡継平は「書物の挿画は、読者に深い印象を与えるもので、文章よりも長く頭に残ることがある。予の経験よりしても、往年読んだ書物の辞句は既に忘れてしまっているが、その折目に留まった挿画は、今に尚ほ髣髴と想い浮かべて、その挿画から、そこの文章を想い出すことが往々にある」と、挿画が与える強い印象および想起の機能を強調している。

1930年代は、挿画に関する関心が非常に高まり、挿画解説書と共に教師用雑誌にも挿画の扱い方に関する記事が掲載された¹²⁾。その内容は写実的説明が主になって、当挿画がどのような場面であり、人物は誰であるかなどについてである。

1940年の教科書の挿画には、本文の記述との一致が求められている。「何れも本文の記述と照応し、教授の徹底を図れるものなり。新たに掲載せる挿画の典拠については、別紙修正一覧表に略記せり。なほ巻末の国名・府県迷対照地図は、本文に記載せる旧

国名の現在の府県に於ける概略の位置を知らしめなり。本図を用ひて濫りに本文に記載なき旧国名を附加して教授する如きは、本図掲載の趣旨にあらず。」『小学国史上編纂趣意書』(1940)挿画群は以前のものより削除、修正、改正され、また新たに掲載されながら、その重要性はますます大きくなっていった。

1943年の『初等科国史上・下』の編纂趣旨解説で中村一良は、「新教科書に於いては、挿画を一新して、之を従来よりも、豊富ならしめるとともに、特にその絵を、気品に富み、且児童の興味を喚起する躍動的ものたらしめるやう配慮しました。また画題の説明にも工夫をこらし、なるべく平板的な解説風の説明を避け、含みのある表現を用ひてあります。児童が説明そのものからも、挿画の精神を感得し、その感銘を心に刻んで、本文の理會をますます深めるやう取計らったのであります。」と書いている。よって、1943年に新たに導入した‘挿画の一新、躍動的なもの’については以前と何が違うかを見ていく必要があるだろう。

教科書編纂趣意書からみた挿画は、最初の‘正しき根拠あつて静的イメージ’から、活動的なイメージ、興味を引くイメージへ、そして、テキストを想像・想起させるイメージを経て児童の興味を喚起する躍動的なイメージへと変化した。また、挿画が視覚的印象へ精巧に洗練していくにつれ、教室における教師たちの講術は制限されたように定まった。この変化は教育におけるイメージの比重がただ大きくなっただけでなく、「事実」を伝える際に働いた様々な経路を教科書の本文とイメージへ固定することで、それ以外の可変的なもの（例えば、教師の伝達能力によって変わる印象）を減らし、より明確に伝えようとする教育的意図を含んでいる。

2. 教科書における戦争挿画

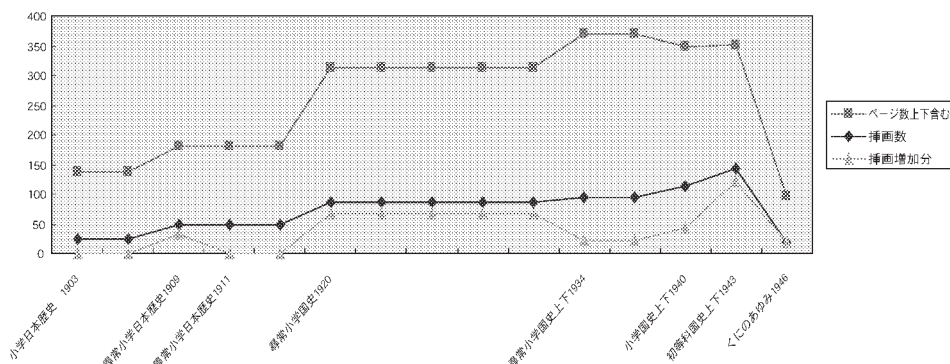
本章では歴史教科書の戦争挿画を対象に、4つに分けて(1)王政復古をめぐる内戦、(2)日清戦争、(3)日露戦争、(4)日中戦争・太平洋戦争の各時期における戦争の表現形式と素材の変化を見て、歴史知の伝達イメージに各時代の社会的現実構成の規則がどのように反映されたかを明らかにする。

図表2は国定教科書以降の歴史教科書の挿画数を

図表 1 歴史教科書と戦争挿画の形式

1868	1882	1889	1892	1893	1898	1900	1903	1909・1911	1920	1934	1940	1943	1946
	小学校 用歴史 1～4	小学校用 日本歴史 上・中・下	帝国小 史1・2	小学校用日 本歴史全編 1～3	新選帝国 史談 1～3	小学国 史 1～3	小学日本歴 史1・2	尋常小学口 本歴史1・2	尋常小学 国史	尋常小 学国史 上下	小学 国史 上下	初等科 国史 上下	くにの あゆみ 上下
内閣				挿絵戦争 争描写			遠近法		考証挿 画・地図	記念絵 画	記念絵 画	記念絵 画	無
				日清戦争			戦争場面・ 遠近風景		地図・皇 室記録	記念絵 画	記念絵 画	記念絵 画	無
				日露戦争			日露戦争		考証挿 画	地図・記 念絵画	記念絵 画	地図・ 簡略画	無
										15年戦 争		簡略画	無
				写真記録			写真報道 の始まり		記念絵 画館建 立	絵画館 公開			

図表 2 国定歴史教科書の挿絵数の増加



表わしている。挿画は徐々に増えていき、1909年と1920年、1943年に新たな種類を加えている。図表1は戦争挿画が教科書ごとにどのような形式を持ってイメージ化されたかを示している。

(1) 王政復古をめぐる内戦

(図表 3、4、5、6)

明治初期、王政復古をめぐる内戦の経過は木版錦絵を通じて知られていた。その視覚的習慣を反映して1898年『新選帝国史談』の内戦挿画では戦場の風景が劇的に表現されている。1900年『小学国史』では戦場の痕跡を写真で写したように羅列している。そして戦士の姿を服装や外的特徴などで戦争の証明になる客観的資料を提示する挿画である。

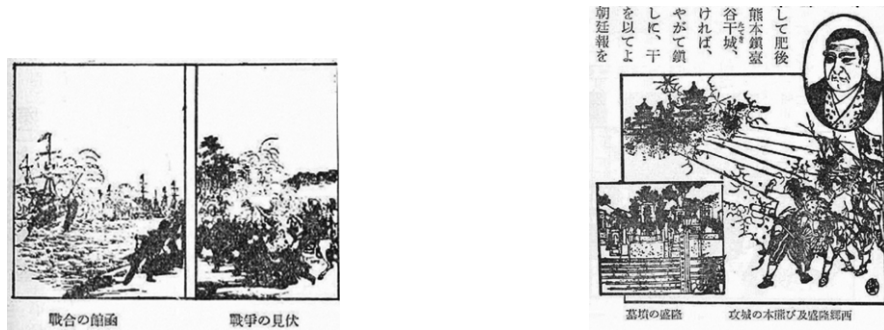
それが、1903年『小学日本国史』では、戦争の場面自体より出戦の行列を、遠近法を駆使して表現した。1920年の『尋常小学国史』に新たに登場したのは、地図で内戦の実際を伝達する挿画である。西南の役の叙述では地図が登場したことで、官軍によ

て熊本城を陥る過程がより詳しく説明されたのが従来の叙述と違うところである。

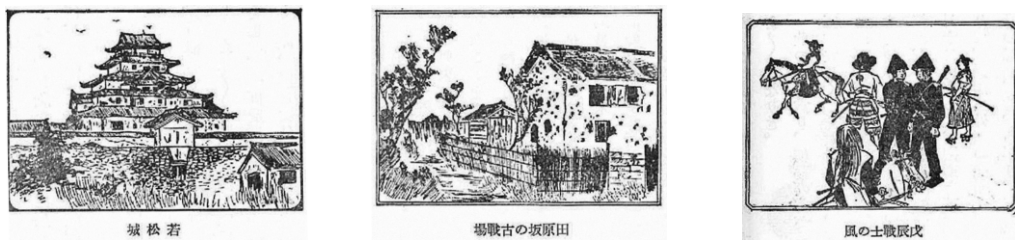
1934年の教科書からは地図とともに、官軍と賊軍を区別なく傷病者を治療し、以降日本の赤十字社の前身になった博愛社の物語を加えることで、内戦の対立を中化する挿画を掲載した。大政奉還の後の出来事に加わった挿画として、1940年の教科書には西郷隆盛と勝安芳の「江戸開城談判」が掲載される。この絵は、聖徳記念絵画館の絵画であり、結城素明が描いたものを使った。まるで談判の場面を写真で撮ったようで絵自体からは何も情報がないが、西郷隆盛と勝安芳の広く知られている顔によって文脈を予測する仕組みになっている。1943年の教科書には、会津の白虎隊が飯盛山ではるかに城を望みながら最後を遂げた場面を描いた絵画を挿画で載せている。1940年と1943年にはすでに記念絵画館の絵画を写真製版で使っており、西欧油絵の様式と構図を取っている。

明治初期の内戦の視覚的演出は、直接戦いの場面

図表 3 1898年『新選帝国史談』



図表 4 1900年『小学国史』



図表 5

1903年『小学日本歴史』



1920年『尋常小学国史』



図表 6

1934年『尋常小学国史』



1940年『小学国史上下』



1943年『初等科国史上・下』



からエピソードを連想させる場面画へ変わっていく。

(2) 日清戦争(図表7、8、9、10、11)

1894年の日清戦争は1898年の歴史教科書に登場した。まだ日清戦争の名称ではなく、平壤の戦いに書かれたが、激しい戦闘の場面を描いた挿画には、演劇的構造が現れる。そして戦争の勝利の証明として清との談判が掲載されている。

1903年では、平壤の戦いが遠近の背景を持って描写されたが、それと似た構図が台湾征伐の場面にも見えている。戦争の視覚化を直接戦う場面で示す慣習は続いている。

一方、1920年の教科書では日清戦争を伝達する挿画に、地図が現れて当時の戦争行路を示している。戦闘の場面は消えて、その代わりに戦争の指揮のために、天皇が大本営を広島へ移し、東京を出発する行列場面を掲載している。戦争が皇族の仕事として意味づけられる始まりである。その関わりは、台湾征討の叙述に関しても北白川宮能久親王の苦勞談が主になって挿画にも台湾に滞留している姿を写真のカットのように載せている。

1934年の教科書に掲載された「広島大本営軍務親裁」は明治神宮絵画館所蔵の南薫造が制作した絵画である。戦争は完全に天皇を中心に語られ、真ん中に中心人物が置かれ、次に周辺人物を配置する構図

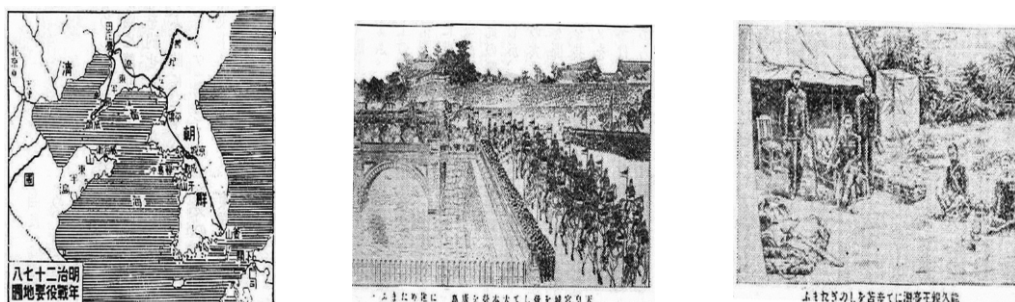
図表7 1898年『新選帝国史談』



図表8 1903年『小学日本歴史』



図表9 1920年『尋常小学国史』



を持っている。この時期における戦争の意味は、単に戦いに勝利する場面を提示するに留らず、国家の頂点に立つ中心人物をも連想させる。挿画の中の戦争は、写実的な記述法で描かれているが、その印象は以前のものと違う特徴をもっている。

1943年の教科書では黄海の海戦を鳥瞰する絵が載っている。1898年の海戦図に比べると、写真写実性に近づいている。

（３）日露戦争（図表13、14、15、16）

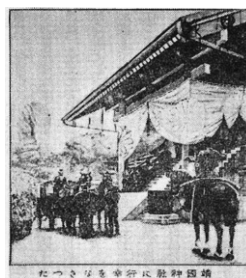
日露戦争は、様々な意味で以前の戦争の視覚化とは違う環境の中で伝達された。戦争報道において写真が本格的に使用されるようになったのはこの頃からである。日清戦争からつかい始まった写真は、日露戦争では活字メディアに報道資料として登場し、読者たちの目を写真付き記事に馴染ませた。日清戦争において視覚報道の主な役割は木版錦絵の挿画であって、写真は海外で実際に戦争があったことを証明するインデックス的機能をもっていた。しかし、日露戦争の視覚報道では写真がもう意味が変わっていく。つまり視覚報道の殆どが写真資料に基づくようになり、情報の量が大幅に増えると、写真の価値は、実際にそのまま写したという珍しさでは続けられなく、より印象的な伝え方を模索するようになる。

図表12は、日露戦争を前後に新聞のイメージの形式が一変する状況を表している。

文字と一緒に写真が印刷されたのは1904年の報知新聞が最初であり、日露戦争を境に刊行される様々な雑誌には、どのような扱いであれ、写真が必ず掲載されるようになってゆく。

木版の版画から網版写真への転換は、新聞が最大のメディアだった当時としては大きな影響力を読者に与えた。日清戦争の錦絵で確認されたビジュアル化が、日露戦争ではいよいよ写真で実現されたところから、戦争が視覚化を促した刺激剤であったといえる。その他、この時期に報知新聞は写真画に色をつけて視覚に訴えた。日露戦争開戦の時は8、9万部だった報知新聞の部数が同年末に一举に20万部にまで増え、部数伸張には写真の力に負うところが大きかった¹³⁾といわれる。報道写真は当時読者にとっての視覚情報であるのみならず、このような背景下で、日露戦争以降に初めて刊行された1909年の教科書には満州軍司令官の奉天入城と日本海の手海戦を描いた挿画が載っている。これらは写真資料に基づいた挿画である。その際、教科書の歴史叙述は、開戦と展開の状況を軍隊の移動、合戦の場所と時間、成果および勝利を中心に語っていて、挿画と本文叙述の関連性が少しずつ見えている。

図表10 1934年『尋常小学国史』



図表11 1943年『初等科国史』



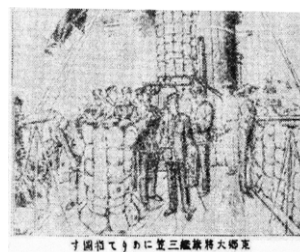
図表12 1904年一年間四紙が掲載した木版画と総写真枚数比較（出典：『報道新聞と顔写真』）

	木版	写真	写真・木版%	網版写真の初出掲載日
報知新聞	906	640	70.6	1904.1.
東京朝日新聞	2521	62	2.5	1904.4.
東京日日新聞	1031	258	25.0	1904.4.
読売新聞	763	224	29.3	1904.9.

図表13 1909年『尋常小学日本歴史』



図表14 1920年『尋常小学国史』



日露戦争に関する1920年代の教科書挿画の特徴は、戦争の特定人物を中心においた構図を使ったところにある。しかし、この構図は元の絵画から来ている。図表14の右の挿画の元を描いた東城鉦太郎(1865-1929)は、お雇いイタリア人絵師エドアルド・キヨソネおよび川村清雄に師事し、戦争画が得意な画家である。1906年海軍省の命に依り、日露戦争海戦画を制作したのがこの絵画である。現在知られているこの絵は関東大震災で一度焼失した後に描き直されたものである。日本海海戦においてロシアのバルチック艦隊と接触した直後の情景を描いたもので、Z旗が左上に上がっている。この絵が有名になったのは1920-1921年改定された『尋常小学歴史』に日本海の決戦の挿絵として採用されたからである。ここで起こる疑問は、戦争に関する写真イメージが溢れる日露戦争の表現に、なぜ絵画を挿画に使ったかにある。

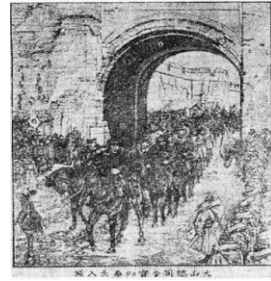
その端緒を歴史叙述の特徴から一つ考えられると思う。図2が示すように、1920年代の教科書には挿画が増加しており、その中で戦争挿画には、以前には見えなかった叙述様式、つまり挿画にかかわるエピソードの本文と本文を連想させる挿画が戦争の語りとして新たに現れたのである。1909年の叙述においては合戦と海軍の勝利を説明する文章であるに対して、1920年の叙述には合戦の前に旗艦三笠に信号

のZ旗を掲げて「皇国の興廃此の一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」といった物語へ変わっている。戦争の叙述は軍団の進行状況および結果有無の説明ではなく、戦争の意味を強く印象づける物語をもって語られる。この時期における挿画は、イメージが本文叙述の傍証として提示される関係を越えて、本文と絵画が相互的に同じメッセージを指すことで、本文を読むと絵が連想され、絵を見ると本文が想起されるような関係を成立させる役割を果たしている。

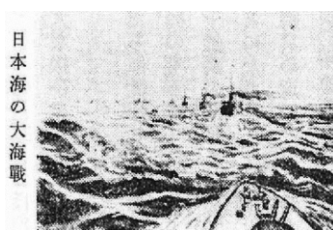
日露戦争の挿画を特徴づけることは、出来事の体系的人物を描きだして、その中に物語を入れ込むことである。それは写真だけでは出来ない視覚的役割が挿画にあったからである。写真が登場しはじめた時期、歴史教育における「事実」イメージは、正しい根拠のあるものであった。事実は外部にあって、イメージはそれをそのまま写して見せるものである。しかし、写真のような物事の事実性が一般化すると、歴史教育における「事実」イメージは、物事の羅列では物足りなくて、見る側に想像を促し、全体像を持たせるように働きかけるものになった。個別の事実には全体像を組んでくれる物語が必要になったのである。

写真という事実を写しだす強力なメディアが登場したにもかかわらず、1930年代の歴史画運動で活発に歴史画が制作されたのは、「事実性」をめぐるイ

図表15 1940年『小学国史』



図表16 1943年『初等科国史』



メージの理解が大きく変化したからである。

1940年の教科書には公式的絵画を挿画に多数掲載した。図表15は日露戦争と関わる絵画の挿画で、中は渡部審也の「乃木將軍とステッセル」（養成館）で、右は鹿子木孟郎の「日露戦役奉天戦」（明治記念館）である。この歴史画群は想像上の絵ではなく、あくまでも考証の産物であることをこの時期は重要視した。旗艦三笠の絵画は、他に養正館の記念絵画にも同じ構図の絵が見えることから当時の写真を元にして詳細に、実際よりもっと正確に描き出そうとする試みであった。このような絵画が公式的な教科書に広く使われると、歴史叙述に信憑性を与える。図表15は記念絵画館の絵画を引用した挿画である。その引用は、原画の形のスケッチだけではなく、質感、色、サイズなどへと、なるべく原画に近いものを掲載しようとする努力につながる。写真をおいて絵画を使う現象は、写実性に基づく視覚化からみると逆行として見なされるかもしれないが、それくらい写実性に対する観点が変化したことがわかる。

日露戦争に関する視覚化は1943年に一変する。視覚教育に写実性を消したような、太い線と簡潔な描写で描かれた挿画が使われた。詳細なことが省略され、またタイトルがなければどのような事件を指すものかを予測するのが難しい絵である。教科書編集趣意書では1943年の挿画が気品あるもので、児童の

興味を引き出すと書かれてあるが、児童に対する視覚教育にどのような変化があったのかは引き続いて考察していきたい。課題である。1940年代の教科書で物語と絵画の想起関係を用いた直後にこの表現形式をとることは、イメージの想起力を写実的事実性から離して考えようとした理解と関係があるのではないかと思われる。

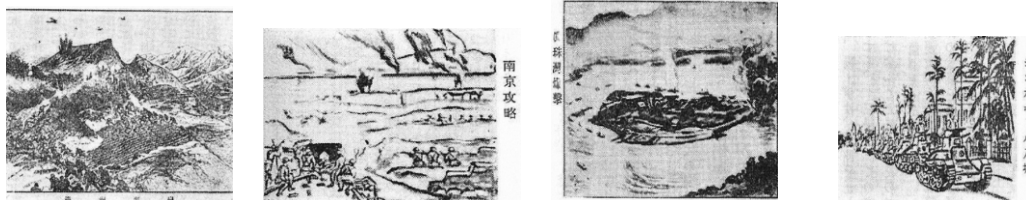
（4）日中戦争、太平洋戦争（図表17、18）

軍国主義へ転換した1940年代教科書の当代歴史叙述、特に戦争に関する表現は二分化していた。一方では拡張された帝国日本領土の大きさを地図で提示し、国家の範囲および状況を表象する風で、他方で

図表17 1940年『小学国史』



図表18 1943年『初等科国史』



満州事変と真珠湾攻撃、シンガポール入城など現在歴史と関わる部分では写実的描写は消えて、単純明瞭な線で児童画のように描かれた戦争表象が現れるのである。錦絵の演劇的表現と、写真のように遠近法的絵画を得てから登場した、単純化した戦争画は児童教育における写実性の理解にある変化から起因するのではないか。1943年の教科書挿画の特徴は、日露戦争以前の戦争は油絵の記念絵画で表現し、以降のものは簡略画ないし児童画のような様式で表現し分けている点にある。

1946年の米軍政下の教科書『くにのあゆみ』では、以前に使われた写実的あるいは簡潔的な歴史挿画が一切消えて、実物および遺物としての絵画のみが少しだけ掲載された。これを単にイメージに対する統制としてみることも可能であるが、戦前期に形成された視覚性のどのような側面を規制しようとしたか、以降の児童書物に何が引き継がれ、また何が引き継がれなくなったかという観点で見る必要がある。

結論

本稿では、「見せて教育する」教育の概念変化を、教科書の挿画を通じてみるために、1章では歴史教科書編纂趣意書を概観した。歴史教育における「事実」のイメージは、最初「正しき根拠あるもの」であった。事実は外部にあって、イメージはそれをそのまま写して見せるものである。しかし、写真的事実性が挿画に一般化されると、歴史教育における「事実」は、物事イメージの羅列では物足りなく、見る側に想像を促すもイメージへと変異する。

次に2章で歴史教科書の戦争挿画を辿った結果、各時代の教科書のイメージには当時の社会に通用される視覚的モデルが反映されていることを確認した。歴史画が教科書挿画で多数登場する1930年代の教科書には、本文内容とイメージが相互に関わり「物

語」の形式をして戦争の全体像を指し示そうとした。歴史の視覚的演出を辿る過程では、近代的知の伝達にイメージの比重が量的、質的に大きくなったことは勿論、伝えようとする知がイメージのあり方によって影響を受け、変容する様子を見ることができた。

参考文献

注にあげた文献は省略。

『小学校用歴史』1882、『小学校用日本歴史上・中・下』1889、『帝国小史1・2』1892、『小学校用日本歴史全編1～3』1893、『新選帝国史談1～3』1898、『小学国史1～3』1900、『小学日本歴史1・2』1903、『尋常小学日本歴史1・2』1909・1911、『尋常小学国史上下』1920・1921、『尋常小学国史上・下』1934・1935、『小学国史上・下』1940・1941、『初等科国史』1943、『くにのあゆみ上・下』1946
仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集成11巻一編纂趣意書』東京書籍株式会社、1982、p647-716

注

- 1) クリストフ・ウルフ編、藤川信夫監訳『歴史的人間学事典』2、勉誠出版、2005、p274
- 2) クリストフ・ウルフ編、藤川信夫監訳『歴史的人間学事典』2、勉誠出版、2005、p512
- 3) 今井康雄「教育において伝達とは何か」『教育哲学研究』97、教育哲学会、2008、p124-148
- 4) 香曾我部秀幸「明治大正期の小学校教科書における挿絵の考察：歴史・修身・国語教科書に描かれた英雄像」『教育専攻科紀要』10、p43-55、神戸親和女子大学、2006；多木浩二『天皇の肖像』、同『肖像写真一時代のまなざし』2007、柏木博『肖像の中の権力—近代日本のグラフィズムを読む』1987；岩井茂樹『日本人の肖像—二宮金次郎』角川学芸出版、2010；磯田一雄『異民族に強制された『皇国の姿』—朝鮮の国史教科書の変遷

- 一」『皇国の姿を追って』皓星社、1999
- 5) クラウス・モレンハウアー、今井康雄訳『忘れられた連関—教える・学ぶとは何か—』みすず書房、1987
- 6) 山梨俊夫「描かれた歴史—明治の中の「歴史画」の位置」神奈川県立近代美術館『描かれた歴史—近代日本美術にみる伝説と神話』1993；林洋子「明治神宮聖徳記念絵画館について」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第11号、平成6年（1994）、82-110；高柳有紀子「歴史画」としての明治神宮聖徳記念絵画館壁画」『芸術学学報』8、p18-31、2001、金沢芸術学研究会；小堀圭一郎「美術史上の「祈念碑的絵画」の位置」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第20号、平成9年（1997）；駒田和幸「日本近代美術史の授業—歴史画をめぐる」『歴史地理教育』606、p70-75、2000；北原恵「教科書のなかの「歴史/画」—天皇の視覚表象（特集 美術史学と歴史学の現在）」『歴史評論』634、p14-24、校倉書房、2003；丹尾安典「国史の図像群」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊49、p109-124、2003；駒田和幸「絵画から考える—韓国併合」『歴史地理教育』763、p26-31、2010
- 7) ウィリアム・アイヴィンス、白石和也訳『ヴィジュアルコミュニケーションの歴史』晶文社、1984、コミュニケーション学会、2011
- 8) 戦争と視覚メディアに関する先行研究としては、小林弘忠『報道新聞と顔写真：写真のウソとマコト』中央公論社、1998、紅野謙介「写真の中の「戦争」—明治30年代『太陽』誌を中心に」『近代日本の文化史3』岩波書店、2002などがある。
- 9) 海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版会、1969、p108
- 10) 月刊『小学校』臨時増刊新国定教科書号（明治43.2）、海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版会、1969 p126-127再引用
- 11) 中野八十八『さしえ中心感激の国史教育』啓文社、1926、土屋敏雄『挿画を中心とした小学国史指導書』甲子社書房、1927
- 12) 小酒井儀三『国定国史挿画解説—考証精確』宝文館、1931、小島貞三『国史教科書挿画の精神と指導』晃文社、1937、大松庄太郎「国史の見真教育について」『学習研究』奈良女高師附属小学校学習研究会1935-10；大松庄太郎「国史絵画について①、②」『学習研究』奈良女高師附属小学校学習研究会1935-11、12；大松庄太郎「改定高小国史下巻の挿画について①、②」『学習研究』奈良女高師附属小学校学習研究会1937-7、8